

『歯科衛生士としての技術向上を目的する海外研修成果の報告』

日本大学歯学部

成島 桂子

【はじめに】

本報告は、佐藤奨学金・研究費の支援を受け、アメリカ合衆国ハワイ州および大韓民国において実施した海外研修の成果をまとめたものである。

佐藤運雄先生は、日本大学歯学部の前身である東洋歯科医学校を創設され、口腔を全身の一部として捉えるという医歯一元論を提唱された。私は佐藤先生のお考えを、口腔内の問題にとどまらず、全身、さらには心身の相互関係を重視する視点として受け止め、海外ではどのような考え方や対応がなされているのかを学びたいと考え、本研修に臨んだ。

また、先生は今回の研修国の一つであるアメリカ合衆国に留学されたご経験をお持ちであり、その志を受け継ぐ奨学金のもとで本研修を実施できたことを大変光栄に感じている。

本研修を通じて、歯科衛生士としての社会的使命と、専門職として果たすべき役割を改めて認識する貴重な機会となった。

【アメリカ合衆国ハワイ州での研修内容】

海外研修では障壁となりやすい「語学の壁」がある。通訳を通しての質疑対応には限界があり、聞き役となり断念してしまうケースが見受けられる。本研修先の選択地は、日系人の多いハワイ州であり、日本語を理解できる歯科医師が多く、医療用語に精通した通訳者が配置された環境が整っている大きな特徴があった。

①日米ダブルライセンス取得歯科医師・歯科衛生士によるセミナー

（米国デンタルクリニックの特徴について）

日本の歯科医療における個人経営では、総合歯科診療が主流であるのに対し、米国では専門分化が極めて多い。各分野が、独立した専門クリニックとして機能しており、個人歯科医院ながら、医療オフィスが集結しているビルのため、同じ建物内で行き来できる利便性がある。ただし、患者は治療工程ごとに医療機関を移動することになる。歯内療法処置の初診は、2時間枠が確保されているケースがあり、詳細な問診とインフォームドコンセントに長い時間が費やされているようである。矯正歯科治療中のメンテナンス事例では、予防歯科が併設されている専門クリニック（歯周病科等）へ移動する必要がある。この体制は、専門分野に特化した治療レベルの高さがうかがえるものの、患者の通院負担や治療時間の長期化といった側面も兼ねているようにも思われる。



（米国歯科衛生士について）

これまでにない新たな認識を得た点としては、歯科衛生士によるプロフィラキシス処置に対し、極めて詳細な同意書が整備されていることであった。実際の訴訟事例として、「定期的にメンテナンス処置を

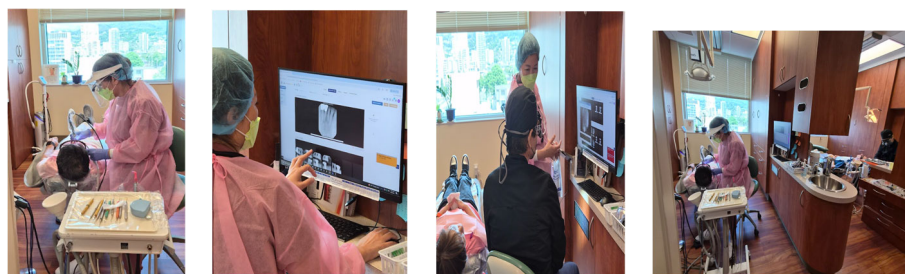
受けていたにもかかわらず歯周病を発症したのはなぜか。管理を行っていた側に責任があるのではないか」という訴えが存在するとの説明があった。米国では州によって、歯科衛生士に歯科用レントゲン撮影や浸潤麻酔が認可されている場合もあり、こうした業務範囲の広さと比例するように、訴訟リスクへの対策として詳細な同意書が厳重に整備されている点が強く印象に残った。

日本の歯科衛生士は、「歯科医師の指示のもとに業務を行う」という法律上の位置付けにより、一定程度守られている側面がある。一方、米国では歯科衛生士自身の判断に基づく業務が存在し、その分、責任の所在や専門職としての自立性に大きな相違がみられることを実感した。

また、歯科衛生士の就職率や離職率についても意見交換が行われた。米国では歯科衛生士は人気職業の上位に位置付けられており、離職率は低い傾向にある。これに対し、日本では離職率が高いとされ、その背景には「専門職であるにもかかわらず、経験年数を重ねても自立した立場に立ちにくいこと」や「待遇面への不満」などがあると考えられている。

近年、全身疾患と口腔との関連性が注目される中、歯科衛生士には医科分野との連携を含めた全身アセスメントへの介入が期待されており、活躍の場は確実に広がっている。口腔バイオームケア対策となる疾患予防を担う存在として、歯科衛生士は極めて重要な役割を果たしている職種である。

こうした専門性や将来性の魅力が十分に実感されていない現状については、重要性を実感できる環境整備が、今後の日本において強く求められていると感じた。



(日本の歯科医療論文について)

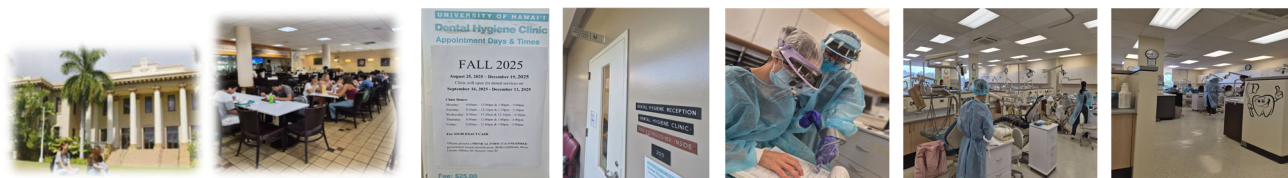
本セミナーは、講義を一方的に受講する形式ではなく、日米の歯科医療の相違点について意見交換を行うディスカッション形式で進められた。米国側からは、日本の歯科分野における論文は内容的に非常に興味深く、質の高いものが多いとの評価が示されたが、英語翻訳された論文数が極めて少ない点が課題として指摘された。ディスカッションを通じて、私自身、日本人として日本の歯科医療のみならず、経済情勢と医療制度との相関関係について意見を交わす経験がほとんどなかったことに気づかされた。

日頃、情報を受動的に得る機会が多いものの、自らの考えを相手に向けて発信する力が十分に備わっているのか、言葉の重みと責任について深く考える契機となった。海外研修とは、単に知識や経験を得る場ではなく、これまで培ってきたものを「言葉」として表に出し、自身が評価される場でもあることを強く実感した。

②ハワイ大学マノア校歯科衛生士教育施設での研修

歯科衛生士学生によるプロフィラキシス処置を実際に受診した。学生診療でありながら、事前に記入した問診に対して、こと細かい確認、バイタルサイン測定、電子カルテへの記録作業までの一連の流れにおいて、意識の高い責任感がみられた。学生は、常に自身で問題点を把握しながら、歯科医師への確に報告する体制が整っている。卒業後は、一般的な新人扱いはない。10年目のようなベテラン歯科衛生士と分け隔てなく即戦力で勤め上げることが要求される。今回患者として、受診したことは、職業意識の

高さや学習意欲の姿勢に身の引き締まる体験であった。治療費については、米国は、日本のような国民保険制度が整っておらず、未就職者はほぼ保険加入ができない。加入保険の種類によっては、治療選択や費用負担に大きな差が生じる。学生診療は比較的低コストで提供されており、地域診療の一端を担っているように思われた。

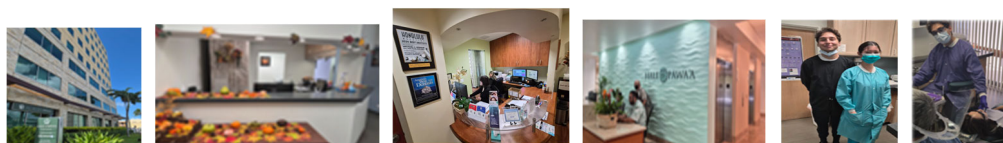


③専門歯科クリニックでの臨床見学・体験

研修先については、当初予定していたインプラント手術日の変更や当日の受診患者の研修許可などの状況により変動することとなった。

日米ダブルライセンス歯科衛生士が在籍する臨床現場では、歯科衛生士が主体的に患者教育や予防プログラムを担っていた。歯科医師は「歯科衛生士は診療チームとしての対等なパートナーである」とコメントしており、上下関係ではなく、まさしく対等な立場で意見交換を進める診療は、尊重された光景であった。このような、医療チーム内での歯科衛生士としての位置づけこそ、離職率が少ない理由の一つであると推測する。

ハワイ州の歯科診療は、疾病の早期発見と全身管理を重視した包括的な記録体系が整備されており、歯科衛生士が主体的に患者教育や健康維持プログラムを担っている点が特徴である。ライセンスは2年ごとの更新（州により異なる）が義務付けられており、20時間の継続教育（CE）と医療倫理・CPR更新の履修が必要である。この制度が専門職としての質を維持し、常に最新の知識と倫理観を保つことにつながっている。



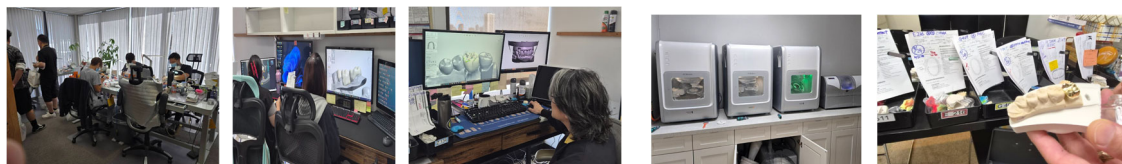
④歯科技工オフィス

スタッフの多くは米国出身のエンジニア経験者であった。米国では歯科技工士の国家資格はない。技工物の設計やプログラミング、製作工程に関する知識と技術があれば職業として従事できる点が日本との大きな相違である。日本ではアルジネート印象材とラバー印象材の併用が一般的であるが、米国の多くのクリニックではアルジネート印象材はほとんど使用されていないとのことであった。なお、後に見学した韓国の医療機関においても、同様にアルジネート印象材は使用されていないかった。完成した補綴物を見学する中で、臼歯部にはゴールドクラウンが比較的多く用いられている点が印象的であった。一方、スマイルラインにかかる部位については、審美性を重視したホワイト系補綴物が選択される傾向にあるとのことであった（見学地域特有の可能性はある）。

（ハワイ州について）

ハワイ州の社会汚染に触れる。ハワイ州は太平洋ゴミベルトと名付けられた海域から日本語が書かれたプラスチックが流れ着く。また、驚くことにプラスチック歯ブラシが大量に打ち上げられている。世界的計画としてのサステナブル環境改善期間は2030年である。カーボンニュートラルや自然由来バイオプラスチックなど次々に事業が展開している。歯ブラシを扱う歯科領域に携わる私自身は、今までこ

のような現状の中、なにか行動すべきことが一つでもあったか。改めて深くこれからの世代のために考えさせられるきっかけを与えられた。



【韓国での研修内容】

ソウル大学歯科病院を主軸に研修。その他、見学時間が可能な場合を考慮し、許可を得ていた建国大学病院・APPLE TREE DENTAL HOSPITAL についても併せて報告する。

①ソウル大学歯科病院

顎顔面輪郭センター、言語障害訓練部門、国際診療など、多岐にわたる診療科および専門部門を見学した。特に、以前より関心を寄せていたインターナショナル歯科衛生士の見学が実現したことは、自身の今後の進路や専門性を考える上で、視野を大きく広げる貴重な機会となった。外国人患者に対しては、治療内容や診療の流れを丁寧かつ分かりやすく説明する体制が整備されており、単なる言語対応にとどまらず、患者の不安や理解度に配慮した対応が随所に見受けられた。さらに、保険会社との関わりにも介入する。その姿勢は、日本における「おもてなしの精神」に通じるものがあり、国や文化が異なれども、患者中心の医療という理念は共通していることを強く実感した。

また、同院では IT 技術の導入が積極的に進められており、患者データの統合管理、診療記録の自動解析、画像診断支援など、デジタル化による業務効率化が顕著であった。歯科衛生士が診療補助のみならず、データ処理や情報管理にも関与している様子から、医療従事者に求められる役割が拡張していることを実感し、次世代型医療の方向性を強く感じた。

さらに、韓国の財閥企業がスウェーデンにおける AI 介護ロボット開発に参画している事例にも見られるように、韓国は医療・介護分野において国際的な技術連携を積極的に推進している。

ソウル大学歯科病院においても障害者歯科医療に力を入れており、先端技術と福祉医療を結びつけた取り組みが進められている点が印象的であった。韓国は最先端技術への迅速な導入力が強みであると捉えられることが多いが、その背景には、常に世界から学ぼうとする姿勢と、国境を越えた幅広いネットワーク構築力があると考えられる。現在では、各国から大韓民国へ学びを求めて訪れる医療関係者も増加しているように感じられた。

こうした状況を踏まえると、隣国である日本における国際交流の在り方についても改めて考えさせられた。日本の医療分野においても国際交流の機会は多様に存在するものの、自身が「学びを提供する側」として十分な専門性やスキルを有しているかについては、現時点では明確な答えを見出すことができず、今後の課題として強く意識するようになった。





②建国大学病院

顎骨手術・顎骨矯正・補綴治療の3分野に特化している。社会経済情勢と矯正治療数は影響する部分があるという点は、大変興味深かった。

歯科衛生士は、各分野専門として配置されている。主に顎骨矯正においては、歯科医師が歯科衛生士に委ねる治療介入が明確に分かれており大変スムーズな治療が進められている。

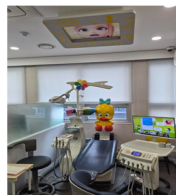
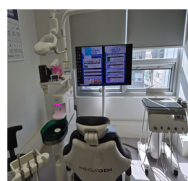


③APPLE TREE DENTAL HOSPITAL（個人歯科医院）

個人歯科医院ながら、各階で特殊な専門領域が7フロアある。免疫ケアアプローチの点滴なども受けられる。ソウル歯科病院の小児歯科と同様に小児歯科ユニットは天井にアニメーション視聴ができる大型のモニターが設置してある。

また、商品開発・口腔バイオームについての研究等があり、プロバイオティクス製品も独自の菌株を保有し力を入れている。私は、長らく心療歯科患者対応に携わっており、韓国における心理状況による免疫低下等々による口腔内バイオームとの影響を研究されているこちらの歯科医院を見学するに至った。厚生労働省は2013年、「がん、脳卒中、急性心疾患、糖尿病」に加えて「精神疾患」を五大疾病に位置づけた。社会変化が進む現在においても精神疾患患者は増加傾向にあり、歯科医療における心身相関の理解が求められている。

歯科心身症や非歯原性疼痛など、心理的要因を背景とする症例は年々増加しているが、医科・歯科の連携体制は未だ十分とは言えない。日本では心療歯科領域が北欧・北米を凌ぐ先進性を持つ一方、社会的認知は低いのが現状である。



【アメリカ合衆国と韓国の共通】

米国および韓国の両国に共通して強く印象に残った点として、インフォームドコンセントの徹底が挙げられる。訴訟文化を背景に、医療従事者の説明責任が厳密に制度化されており、患者に対する十分な情報提供と選択の自由が医療倫理の中心に位置づけられている。その結果、医療従事者の責任意識が高ま

り、患者との信頼関係の構築につながっていることを、実体験を通して実感した。また、メールを活用した連絡ツールを主に活用している。日本の、予約システムにおける担当歯科医へ直接取り次ぐツールがあることには大変驚いていた。

【国際交流の意義と今後の展望】

韓国がラオスなどの地域に展開する国際医療支援活動にも触れ、医療を通じた国際貢献の重要性を実感した。先にも述べた内容に再度触れるが、米韓で共通して発言されたことは、「日本は、実践的に導入可能な大変素晴らしい研究報告論文がある。しかしながら、英語訳が少なく自国内に留まることが非常に多いことは、世界的にはみると影響が乏しい」というコメントである。

これこそが、現地で実際に医療に従事する人々と直接交流し、彼らの言葉や表情、患者への接し方に触れたことは、書籍やインターネットでは得られない深い学びとなった。

【おわりに】

本研修は、歯科衛生士という職能の在り方を国際的視点から見つめ直す貴重な機会となった。制度や文化の違いはあっても、根底にある理念は「人の健康を支える医療」という普遍的価値である。今回得た経験を今後の臨床、教育、後進指導に活かし、口腔から全身の健康を支える歯科衛生士として、より良い医療の実現に貢献していきたい。

最後に、このような貴重な研修の機会を与えてくださった佐藤奨学金・研究費関係各位ならびに、日頃より支援と理解をいただいた職場の皆様に、心より感謝申し上げます。